

筑前高取焼の研究

「筑前焼」から「高取焼」への変容と展開

尾崎直人

江戸時代、筑前福岡藩領内で焼かれた高取焼は、国焼茶陶の中でも独自の発展の歴史を有している。高取焼は他の九州山口各地の窯と同様に、秀吉の朝鮮遠征を契機として活動を始めているが、その初期には桃山様式の茶陶を生産していながら、ほどなく全く新しい様式の焼物生産へと大きく方針を転換する。俗に前者を「古高取」と称し、後者を「遠州高取」と呼んで、ともに高取焼を代表する焼物と認められているものの、その制作の実態や様式成立の経緯については必ずしも明快な説明がなされているわけではない。この兩種の高取焼はともにつくられた当時から茶陶としての高い評価を得ていたことが判明しているだけに、急展開ともいえるそのような転換の背景について、これまで小堀遠州が朝鮮人陶工の八山を指導して好みの焼物を焼かせたことに因って転換が果たされたとするような単純極まりない説明では、十分な理解に達することは難しい。

小堀遠州は周知のように江戸初期を代表する文化知識人のひとりで、幕府の畿内統治における能吏としての活動に加え、作事奉行として数々の建築、庭園などの造作を手がけるとともに、古田織部を継ぐ武門の茶の指導者としても大きな影響力を発揮した人物である。高取焼が歴史的にその存在を知られるのは、そのような遠州との深いかかわりをひとつの基盤としていることは間違いない。しかしながら具体的な高取焼発展の事績について関心を深めようとすると、なにひとつとして明瞭なことがないことに驚かされる。例えば、基本的に筑前福岡藩の御用窯である高取焼の活動については、目的や方針などをはじめとする藩の種々の現実性を帯びた関与が存在する筈なのに、ほとんど何も解明されていない現状に気付かされる。また、朝鮮人陶工の手になるとされる高取焼が何故に渡来後まもない陶工の手による初期の窯から、豊かな和風の意匠性を具有した作品をつくるのが可能なのか。京都や大阪からの元和年間ころに比定される近世都市遺跡からは内ヶ磯窯（活動期間は慶長末年から寛永年間初期）の製品が少なからず出土するが、それらは同時代の畿内周辺の国焼窯（備前、伊賀、織部など）と驚くべき造形的類似性を示しており、上方の茶の湯界で流行していた造形嗜好への的確な対応生産の背景には、明確な理由が確実に存在していると考えてしかるべきである。

本論考はこのような観点から、高取焼の茶陶としての造形的変遷のプロセスとその歴史的背景を明らかにすることを第一の目的としている。それによって高取焼が江戸初期の陶芸史や文化史のなかでいかなる意義を有しているのかを明らかにすることを試みるものである。具体的な考証としては高取焼の活動を理解するための要素として、全体を六章の部立てとし、相互に関連を持たせながら考察をすすめる。

第一章「高取焼研究史と窯の活動」では、これまでに発表された史料についての概観をお

こなう。『筑前国続風土記』や『歴代高取記録』などの基礎史料に加え、高取焼について紹介、考察した文献などを時間軸に沿って検証し、次第に深まってゆく高取焼観を見てゆく。あわせて陶磁器の近代的研究のうえで欠かせない考古学発掘調査の成果についても、高取諸窯についての調査報告書をもとに概要を紹介する。

第二章「内ヶ磯窯をめぐる諸問題」では、従来、渡来陶工にばかり目が向けられ、それによって歪みを生じていた諸問題を取り上げる。具体的には新しい史料によって邦人陶工の存在と活動を明らかにし、京大阪などの消費地遺跡から出土する高取焼遺物との関係や流通などの問題についても考察する。さらにそれらに関係して従来から言われていた内ヶ磯窯の活動期間に対して修正意見を提起し、これまで活動を停止していたと看做されていた期間に藩主の関与が存在する事実を明らかにして、高取焼茶陶の重大な転回点である状況について考証する。

第三章「筑前藩主・黒田忠之と高取焼の変容」では、藩窯である高取焼の運営について藩主である黒田忠之の関与の実態とその背景や目的などについて考察する。それにより將軍家・徳川秀忠の茶数寄との関係にふれ、高取茶陶の展開に大きな影響を与えている実態を見てゆく。

第四章「高取茶入の編年」では、高取茶陶の中心的器種である茶入・水指などについて伝世作品の編年を試みる。それについては高取諸窯から出土する陶片資料の分析を基礎とするが、技術的特徴の変転のなかに桃山様式から寛永様式（遠州高取）へと展開する重要な変化が見て取れることを明らかにする。また遠州によって最高の評価が与えられた「横嶽」茶入は、高取焼の編年作業の基準として特に重要な意味をもつが、遠州書状の検討によりその制作年代を推定する。

第五章「高取焼と江月宗玩」では、大徳寺の禅僧として公武にわたる江戸初期の文化知識人層に少なからざる影響力を発揮し、また黒田家とも深いつながりをもつ江月宗玩をめぐる、高取焼との関係について考察する。江月は若い時分から小堀遠州とは昵懇の間柄であり、遠州の茶の形成にも強い影響力を有する人物と目され、高取焼の発展のいわば背景を理解するうえでの重要な鍵を担っている実態を見てゆく。

第六章「筑前焼から高取焼へ」では、歴史的にははじめ筑前焼と称され、ほどなく高取焼との名称で知られるようになった呼称の変化のなかに、茶陶高取焼の成立と様式展開の実態的諸相が含まれていることを見てゆく。また小堀遠州との深い関わりを象徴する「遠州高取」の呼称についても、歴史的経緯とのかかわりから考えてみる。

以上の検討考証により、高取焼の茶陶としての成立過程や歴史背景、その後の発展の筋道はおおむね解明することができたと思う。すなわち、高取焼茶陶の編年、高取焼の生起と発展に対する黒田忠之の活動と歴史背景、小堀遠州の茶の湯と高取焼の関係、および江月宗玩を通して見た小堀遠州の茶の湯などの内容と実態など、高取焼を歴史的に位置づけるうえで重要な要素を相互に関連性を持たせつつ、茶陶高取焼の成立と展開にまつわる全容をほぼ明らかになし得たと考える。